

いつか、大切なところ

魚住 直子
こまおり 純文 絵

タタン、タタン、タタン、タタン。

電車は軽やかなリズムでゆれている。あと十分でとうちゃくだ。もうすぐ友達に会えると思うと、亮太はわくわくした。四年生が終わった春休みに、亮太は父さんの転勤で引っこした。電車で二時間はなれた町だった。

引っこすことになったと初めて聞いた夜を、今でも覚えていいる。知らない所に住み、知らない学校に行くなんて、考えただけでどきどきした。三年、四年と同じクラスになった一平や駿と、とても気が合っている。仲のよい友達と別れるのはぜったいにいやだ。シヨックでねむれず、常夜灯のより光を見つめ続けた。終業式の日には雲一つなく、よく晴れていた。青空の下、亮太はなみだがあふれた。一平と駿もしきりに目をこすった。

それからひと月がたち、四月の終わりの休日に、一平と駿に会いに行くことにしたのだ。待ち合わせは前の小学校の校庭だ。一人で電車に乗り、前の町に行く。いや、「行く」じゃなくて、「帰る」だ。亮太にとっての自分の町は、今でも前の小学校がある町だ。そして、それはこれから永遠に変わらないと決めている。自分の学校に帰れるんだ。そう思うだけでおねがはずんだ。まどの外がまぶしい。亮太は景色をながめながら、電車のリズムに体をゆらしていた。

校庭に入った亮太は、びっくりして思わず立ち止まった。

だれもいない校庭に、一平と駿だけが待っていると思っていたのに、たくさん人がいる。ジャンブルジムに上ったり、走り回ったり、縄とびをしたり。低学年の子が多いが、まるで休み時間のようだった。ずっと前に、校庭を開放している休日に来た時は、がらんとしていた。今日は天気がいいからだろうか。

鉄棒の近くに駿がいる。だれかといっしょだ。でも一平じゃない。あれはたしか、四年の時、となりのクラスだった森田君だ。

「駿。」

亮太がよぶと、すぐに気がついた。

「おおっ。」

駿が笑顔で走ってくる。それと同時に、後ろから「亮太。」と声がした。ふり向くと一平だ。校門から走ってくる。二人にはさまれ、亮太はうれしくておねがいはなくなった。

「元氣だった？学校はどう？」

「もう慣れた？友達はできた？」

二人が次々にたずねる。

「ちょっとは慣れたかな。クラスは一つ多くて、四クラスあるんだ。友達も、まあまあできたよ。」

「よかったね。」

駿がほっとしたように笑った。一平もうなずく。

「それで一平と駿はどう？クラスは別になったんだよね。」

「そうなんだ。一組と三組に別れたんだよ。」

一平が答えた。

いつものまにか、森田君もそばに来て、話を聞いている。

亮太は、森田君をちらつと見た。なんだかおねにすき間風が入ってきたような変な感じだ。

四人でかくれおにをすることになった。亮太はにげる側になり、走りだす。

水飲み場の青いタイル。ペンキが少しはげたサッカーゴール。大きなタブの木。変わっていないものを見るたびに、亮太はほっとした。

そのあと、一平の家に行った。森田君もまたいっしょだ。

一平の家では、おもちゃのラケットとテーブルを使って、たっきゅうをして遊んだ。亮太はたっきゅうが大好きだから、前と同じようにはりきった。

お昼ご飯をごちそうになっている時、

「あ、そういえば。」

一平が思い出したように言った。

「あの白い子が、学校のうらの家にすんでるって知ってる？」

「急に消えた子？」

駿がきいた。

なんの話だろう。亮太は、一平と駿の顔を見た。

「ちょっと前に生まれたんだって。その中の一ぴきらしいよ。」

「ほかのも白いのかな。」

「ブチもいるんだって。」

亮太がわからない顔をしていることに気がついたのは、森田君だった。

「ねこの話だよ。」

先週、学校の中庭に、とつぜん子ねこが一ぴき現れた。首輪をしていない真っ白な子ねこで、休み時間になるたび、みんな見に行っていた。家に連れて帰りたいという子も出てきたけど、四時間めが終わって見に行くと、消えていたという。

「だれだよ、ゆうれいねこだって言ったのは。」

一平の言葉に、駿と森田君が笑った。亮太もいっしょに笑いながら、おねの中で冷たい風がふいている気がした。

帰る時間になった。一平と駿と森田君がげんかんで見送ってくれた。これから一平はスイミングに、駿は森田君の家に遊びに行くらしい。

「じゃあねえ。」

一平と駿が、笑いながら大きく手をふる。亮太も手をふり返したが、笑顔を作れなかった。

終業式の日も同じように見送られた。あの時は二人とも泣いていたけど、今はもう笑っている。

もう亮太が転校してしまったからだろうか。会おうと思えば、会えるからだろうか。

でも、亮太はあした、この学校には来られない。あしただけじゃない、あさっても、その次の日も、ずっとだ。

帰りの電車は、ぬれた服を着たように体が重かった。

タタン、タタン、タタン。電車の音も単調で、ちっともはずんではない。しかも混んでいて、すわれなかった。

亮太はつきかわけにばかり、ぼんやりと外をながめた。

前の友達と学校は、何も変わらない状態にもどれると、勝手に思いこんでいた。

「だけど、そんなはずがない向こうは向こうで、新しいことがどんなに起きているのだ。」

……ひとりぼっちになったみたいだ。

なみだがこみあげてきそうなのをこらえ、まどに目をやると、くすんだ色の景色が流れている。

改札を出て、のろのろ歩き始めると、一台の自転車が亮太を追いかけていった。

と思うと、すぐ先で止まり、自転車に乗った女の子がこっちを見た。

「西村君だよ。」

亮太はびっくりして立ち止まった。

「……えっと、同じクラス？」

「ちがうよ。」

女の子は笑った。

「クラブがいっしょ。」

「あ、そうか。」

亮太は、新しい学校でたつきゅうクラブに入った。でも、活動はまだ一度だけだ。顔も全員は覚えていない。

「あと、家が近いの。西村君ちって郵便局の近くでしょ。うちもあの通り。」

全然知らなかった。

「さっきまで、児童センターでたつきゅうしてたんだよ。」

「たつきゅう台があるんだ。」

「三つ。みんな、けっこう来てるよ。今度西村君も来たなら。」

行きたい！亮太はうれしくなった。今度行くよと言おうか。ありがとうと言ったほうがいいか。

女の子は亮太が返事をする前に、「じゃあね。」と、自転車をこぎだした。水色のパーカが風にひるがえり、どんどん小さくなっていく。

「亮太。」

ふり返ると、母さんだ。

「やっぱ、さっきの電車だったのね。お帰り。」

「買物をしてきたらしく、ふくろを両手にさげている。」

「今、だれとしゃべってたの？」

「名前は知らない。」

「母さんがびっくりした顔になる。」

「えっ、知らない子としゃべってたの？」

「そうじゃなくて、同じ学校の人だよ。名前は知らないけど、そのうちわかる。」

言ってから、そのとおりだと思った。

今、知らなくても、そのうちにわかる。ここで知っていることが、今、知らなくていくのだ。

ふと、今度の学校の教室が目にかんだ。転校した初日、にげ出したくらいどきどきした教室だ。

でも、いつのまにかそんな気持ちはなくなっている。わからないことは、みんなすぐに教えてくれるし、休み時間に遊ぶときもそれとなくくれる。放課後、同じクラスの子の家に遊びにもいった。それに転校生がめずらしくない学校だからか、あまり注目されずにすむのもありがたい。

あれって、亮太は思った。そうか、今度の学校も悪くない。まだちよっときんちようしているけど、そのうちに慣れるだろう。

「一つ、持つよ。」

母さんのふくろを取り、先に歩きだした。

前の学校も、前の町も、大好きだ。

でも、いつか新しい学校を自分の学校だと思いう日が来るかもしれない。いつかこの町を自分の町だと、迷わず言う日が来るかもしれない。

顔を上げると、まだ明るい大きな空が広がっている。その中を、一筋の飛行機雲が、まっすぐにのびていた。